親

縁

如来の六根常に清らかに姿色温和なるは慈悲衆生を愛する表情。衆生身に敬愛すれば温暖身に触れ。相愛親和の内容は言語に発表して常に交換共鳴、口に聖名を称れば仏親と内容相親愛和す。如来は慈悲常に衆生を憶念し衆生永えに恋念して止まず。心情常に如来を憶念すれば如来又憶念し給う、彼此の三業相離れず故に親縁とす。

仏心は大慈悲

如来は大慈愛の化現、全体愛にまします。経に仏身を観る者は亦仏心を見る。仏心とは大慈悲是なりと。仏身の相好円満、無尽の光明全く愛ならざるはなし。故に大愛の権化たる仏の相好を瞻る時は満腔の慈愛にうたれて仏心の大慈悲なることも思わざるをえぬ。如来が全体愛を以て光明常に我等に注ぎて愛化し玉う。此慈愛に育まれたる我等は満腔の愛を以て如来を憶念せざるをえぬ。

親　愛

如来心光の三霊能の中に於て親縁とは大なる愛即ち大慈悲心と衆生の感情的信念

との感応融合によりて心情を美化するの霊能なり。即ち太陽の熱線に比例すべきものとす。

斯の大慈悲の霊熱に感応する人の心情は平和、歓喜、妙楽、安穏、感佩等のすべての心理上の最も優美なる高尚なる微妙なる甚深なる言うべからざる不可思議的感情の状態なり。譬えば若し太陽の能力より起す所の温熱なからんか地上の有機物が生存し能わざると同じく、如来大慈悲の霊力に依らざれば人の聖き生命は生存すべきものにあらず。大なる愛の光は温和柔軟にして能く人の心霊を生息せしむ。新鮮なる活気は聖きに呼吸せしめ、三昧の妙味に霊の生命は保存せらる。無限の妙楽と自然の歓喜とは如来の泉より湧く。

されば人は如何なる嶮しき艱難の坂困苦の峠に臨んでもまたは失敗の谷に陥ち失意の坑に陥るも、暖かなる慈愛の光は照さぬ隈なく平和と慰藉とは何の時にか与え給わざらむ。

如来の慈愛の温熱は人をして寒慄せしむる畏怖にも憂悲苦悩のなかにもその心情を融和して而して安穏と歓喜とに美化せしむ。

麗かなる春の和き温き霊気に霊酔せばいつしか憤怒、恨戻、嫉忌、復讐、などのすべて害他的の悪しき動機は痳痺して而て温和、同情、博愛、同喜などのすべての愛他の心情起るならむ。若し人一たび此大なる慈愛の浩気に呼吸せる霊き生活を経験せんか、この霊気を離れたる妖霧魔塵の万丈なる大気の生息は実に耐えざる所なり。吾人は謂う、如来の慈愛なる親縁を離れて肉のみの生活はいかに長き寿も欲せざる所なり。

親縁とは如来の無限なる慈愛より衆生の感情等の内容に加被し給う勢力にして、人の方よりは如来を深く愛楽し奉る信念に相応し融合する本質なり。如来は大慈愛の親縁を以て衆生に加え給い人は愛楽を以て之を念持し、衆生仏を憶念すれば仏も亦衆生を憶念し給う。如来を愛し上れば如来も亦衆生を愛寵し給う。相愛親和の相互

する所に、不可思議的神秘の融合を感ず。吾人が感情の信念に霊的愛慕し上る如来の恩容を観じ奉れば、いと麗しく妙えに、いと勝れて美に威厳殊に巍く相好独り勝れさせ給いて、信念のある所に表現し給うは何ぞや。如来の勝応身が相好円満にしていと美しきを示し給うは、衆生に対する大なる愛の権化にましまさずや。是大慈悲の表現にましまさずや。之に対する衆生の宗教衝動は霊的憧憬とし神的恋愛とし之を葵仰し之を憶念して止まず。斯るを感情の信念とす。

如来は唯無縁の慈悲を以て遍く法界に充満し、而して衆生の精神の内容なる心情に融合し、而して神秘的に融合し、神人合一の妙機に歓天喜地の感応を人の心情に与え給いて、世に吹き荒む八風の為にも心を動揺せず、いかなる境遇に臨んでも泰然として心広く体肝かに自然に幸福ならしむるは人の情操に与えらるる恩寵なり。

親縁の中心は愛

宗教的関係の中心真髄は人の心情にありとせば、人の心情中に於て全く我と彼とを同一視しまた生仏一体の観念たらしむるものはいかなるものぞ。そは人の心情の愛なるもの之なり。世に極端なる利己主義を主張するもの謂らく、すべて生物は本能的に利己主義なる者己を愛するを外にして他を愛するは本能にあらずと。吾人は謂う。そは極端なる利己主義にあらずや。人類には本能の発達の結果一種不可思議の感情が人の精神中心に伏在するにあらずや。其れは我と彼とを同一視し自と他とをして異身同体の如きまでに利害苦楽を共に感ぜしむるなり。そは何ぞや、人の心情の中心に在りて彼我一体ならしむる愛なるもの是なり。愛というものは最も強き感情の糸をもて我と彼とを繋ぐ。普通はこの感情の最も強きものは親と子の間にまた恋人の間に於て然りとす。生理的に最も相愛の親密なるは母と子の関係なり。之は本母が子に於けるは自己より分出したるものなれば子に対する同憂同喜は即ち愛という血肉を分けたる母と子の自然なり。また生理の自然に規定せられたる異性の親愛は最も親密なり。然る

に肉体に於ける母子また恋人の間に於て見るよりは尚一層幽微に深邃にして彼我の親密なる愛存す。そは宗教的感情神人の関係即ち人が如来に対する霊の恋愛なるものに於て発見すべし。

宗教的中心たる心情に神秘的神人合一、生仏感応し小我大我の冥合せるより来りし霊愛の如きは肉我の間に於て見るよりはいかにそれ親密なるぞ。宗教中心真髄たる心情の心念に於て最も神人の関係を親密にして彼我一体の観念たらしむるものは愛なりとす。

吾人無始より已来無明に覆われて罪に亡びて空しく貧里に苦み生死にさまよいぬること全く自性天真の父母に離れし故なれば、真に父母を恋念の情に勝えず。また霊き生命に入らんには大なる愛の表れたる舎那円満の月の容を見まほしく、宛ら恋人のそれに類比せり。肉我に迷いて未だ曽て真の大我を自ら覚知せず、生死に流転して転々休止することなし。生死を超絶せる処の大我に帰命融合を求めて絶対的の大安立を得

んとす。此の親縁は如来の内容たる大なる慈愛に依りて、衆生の感情を融合し感化し人の肉血までを愛化し霊き生活ならしむ。

唯知力の理論にのみ如来を認むるのみにしては未だ活ける信仰にあらず。精神生活と雖も此の肉血を離れて活動すべきにあらず。常に如来の慈愛を憶念して久しうする時は此の血気をして悉く霊化し而して麗しき生活を得せしむ。譬えば香器の中に香を容るる時香器また薫ずるが如く、人常に如来の大慈愛を憶念する時は内容自ら仏化せざるべけんや。此を親縁と云う。

愛　楽

至心に深く愛楽す。如来無上の恩寵をもて一切を愛護霊育し給う。故に我らも至心に如来を愛慕し奉つる。

宗教の精髄は感情にあり。所謂自己の罪悪を嫌忌し厭悪し如来の恩寵を欣慕愛恋し妙色相好を憧憬して寤寐に忘るる事能わず、神霊の尊貌を想う時自ら新鮮の活気を生じ生死の苦を厭い法性常楽を欣い神秘の内容に不可思議の妙容を感じ主我の妄執を脱して真我の内に融合し罪悪垢穢の状態より解脱して聖霊態に融入せんと欲する如きものは悉く感情にあり。

如来より衆生に対する愛

如来は無上の愛を現わさんが為に法蔵の応身を発し心霊無上の愛を示さんが為に自己の肉によるの一切の愛する所の妻子珍宝をすてて国を棄て位を捨て権威と栄耀とを破靴を脱するが如くにしたるは何の為ぞや。一切の万類に対する無上の愛が一切をして心霊の光栄と霊福とを得せしめんとする為にあらずや。

彼は甚深悲壮の心情の禁じがたきより「一切の恐懼に為に大安を作さん、之がためにはたとい身をもろもろの苦毒の中に止くとも我行は精進にして忍んで終いに悔いじ」と。心情の切なるを知らざるべからず。吾人如き自己の罪悪によりて亡びに赴くものをして救済の道を立てんが為に思を凝し神を煩したることいくばくぞや。

たとい大海の如きも一人升量して之を尽すに非るよりは寧ろ死すとも止まじとの精進と忍辱とだに屈せざればいつか遂げざることやあると、無尽の大願を以て衆生を摂す。四十八願を発し一々の誓願は衆生の為めと、無量永劫に無辺の身を更えて六度万行を以て衆生を済度す。而して因円かに果満じて正覚を成ず、方便法身の十劫正覚の身即ち是なり。是本来法性法身に具する所の万徳を衆生に与えんが為に十方に発現するを方便法身と名づく。我ら衆生の信仰心と交感し関係を結んでたやすく解脱し霊化せんが為の方便なり。この方便法身を応身と名づく。即ち吾人の信仰に応ぜんが為めなり。

勝応身には一分の欠点なき万徳円満が相好にあらわれて吾人の信仰に感応しては解脱霊化の功を施し給うのである。

この法蔵因位の難行苦行は悉く我らが為になされしものと深く感ずる時また一の欠点なき万徳円満の霊応に対してはいかゞに感ずるであろう。その因位苦難のことどもを思うときは吾人如き罪悪深重なるものがいかなる苦厄にあうとも忍ばれぬことはあらじ。また慈悲の相好は愛の現われなる事をおもわば自ら身心融液して歓喜踊躍するにいたらむ。

我子を愛するミオヤの大悲

一切衆生悉有仏性とて衆生は本覚法身より分れ出たる仏性具有す。仏の性はあれども卵子の如く、これを暖めて孵化し雛子と為して終に鶏の本分が顕われる如くに、衆

生仏性の卵子を暖めて仏性開発霊化するに非ざれば仏性は唯名字のみにて何の功能あらん。絶対大慈悲のミオヤは無明の卵の殻の内にある生死輪廻の迷子を憐れみ、如何にしてか大慈悲の懐の中に一切衆生の仏性の卵子を孵化して真の仏子の面目を現わさしめんかと、子を憶うミオヤの慈悲、自ら久遠実成法界自性の宮に安ずる能わず、万徳円満の身を謙り下り迷子と同じく生死の街に出でて法蔵菩薩の身を受て、いかにせば凭る本覚の自家を迷い出でて生死の夢を貪ぼる子等をいかにかして覚醒しめんと為るも、生死の夢を夢みて自覚できぬ衆生に本覚の自性に至らしむるは難中の難である。然れども一切衆生悉く仏性の卵を具有す。此を孵化して真の仏性が開顕する時は一切は悉く無量光にして無量寿の霊性が顕わるる。然れば三世の諸仏と同じく覚ることが得らる。

爰に一切衆生の大慈父たる如来は三世諸仏慈悲の体にして一切衆生を平等一慈悲の懐に摂めて衆生仏性の卵を暖めて霊性孵化せしめんとの本願を発し玉えり。

是一切衆生を摂取して成仏せしむる光明なり。

爰に十劫正覚の身は喩えば太陽の光普ねく照して一切の植物や動物を生成養育する如くに如来の大慈悲の光明は、遍ねく十方世界を照して衆生の心霊を開発養成し玉う。衆生此の大霊の懐に摂らるる時は仏性の卵子が孵化して真の仏子の面目が顕現す。如来無縁の大慈悲は永しえに照して此に摂取す。

一切衆生は肉体我より見れば衆生の子即ち人の子である。然れども奥底に潜伏して居る仏性から思えば仏の子である。仏性は仏の慈悲に愛育霊化せられざれば霊性は顕動し難し。例えば人類は一切の動物中に最も発達したる理性的動物である。然るに仮令人類の子と雖幼少の時より人の手に依りて教養薫陶せられざれば言語動作知識等が開発し顕動することが出来ぬと。或人山中に遊猟して野獣に等しき人の子を捕獲す其形人類にはあれども匍匐すること獣類の如し。人此に銃を向けるに吼音を発して言語なし。竟に之を捕獲して家に到れり。後に言語等を教養するに人と同じく発するに

至れりと。蓋し察するに一婦人が嬰児を抱きて山中にて猛獣の為に噉まれ然るに天真の嬰児は獣類敢て噉まずして之が獣類に養われてありしならんと。仮令人類の子たりとも嬰児は匍匐す。母之を起たしめ歩行せしむ。また言語等も教ゆるが故に自然と言語を繰り、ついに自在に意思を弁ずるに至る。若し四囲の薫陶なき時は人間としての言語四威儀等も具備せざるや必せり。人類の子たるも獣類の手に養わしめば人類としての知識も啓発出来ず。人格も備うること能わざるが如く人仏性を具有するも師友善知識等の法界等流の仏法に遇い仏の慈悲光明に摂化せらるるにあらざれば仏性顕現し難し。

衆生の仏性は常に念仏三昧に依りて如来の恩寵に養成霊化せられざれば霊能顕われ難し。

三種の愛に比例して親縁を明す

生物が生理の自然に規定せられて我と彼との親密なる相愛の関係を示すもの三種あり。この三種の親愛を以て神人合一の親縁を明さん。一は父子の関係に例し心情の信仰は譬えば慈しみの父、愛の母と愛慕する如くに、心霊の為めにいと慈愛ふかき如来を愛慕し奉り。二に異性相愛の如く衆生如来を愛楽し雲井はるかに霊的憧憬一心に如来を見まく欲しさに恋念する如きは聖きに胸を焦し霊きに思を煩わすこと肉我の異性的の関係なると例せり。但大いに異るは其の内容に於る即ち神的霊妙なると肉の不浄なるとにあるのみ、之れには神を恋人のそれの如くに愛し奉る故に親縁なり。三に小我大我の関係の親愛。心情の信仰が最終の甚深なる精密なる心情の奥に至っては、神の中に己を投じ、已に神秘融合の奥室に至ては小我と大我と調和し、生仏感応、真我の外に妄我なく、如来の大なる愛に同化せられ、如来大我の外に我なく、如来とは大なる我、また観念我または理想とも云うべく、如来は我を客体化したる我に外ならず、ここに至って宗教的関係の最終の真髄に達せるものと云うべし。

母子的に例すべき愛

感情の信仰の初心には、恰も母を離れては成長出来えぬ子として母を依估とする如くに仏を愛慕す。此信仰に対する如来の慈悲は全く一子を愛する母の慈悲に比例せらる。本覚自性天真の親の真源を迷い出し無明に覆われて自ら知らず生死にさまよい貧里に窮子として自性の父母を離れ天真の本国を迷い生死の他郷を以て自家とし、生死流浪の家を栖とす。四大仮和合の身を以て我と謂い真の自性の霊我を未だ覚らず。故に唯仮の肉我のみをまた無きものに愛す。

大悲の霊乳

初めて孤々の声を挙げて玉のような男子は産れたり、人の子生れ出たるや眼はあれ

ども未だ視えず耳は有れども未だ聴くことはできぬ。然ればいかにせば此児は哀々たる母の麗しき顔をも視えまた母を真から慕うように成るであろう。蓋は母には此児を養うべき乳を有てり。母乳に育くまれて児は漸々に長ずるに随いて自ずと眼は見ゆるように発達す。此児の形体すべては父母の生成する所に依って出来た。

衆生の仏性は師友知識のすすめによりて大ミオヤの慈悲の乳房に取りつくことが出来た。我等未だ仏子とは云うものの初めて分娩せられた赤子である。ミオヤの慈悲の温容を瞻むことは出来ぬ。唯称名の鳴く声に慈悲の乳房を含むことが得らる。如来は唯慈悲である。如来の慈愛によりて我等が霊性は育くまるる。恰も赤子が母の乳に養わるると同じことである。我等が霊性は全体如来の慈愛を要求して養わるるにあり、また小児の乳を飲むのは生理衝動なので甘いとも淡いとも乳の味を確めて味うことはないけれども自然と飲みたくなって来るから其要求から衝動して孤々と声を揚げて泣く。我等初めより如来の霊味を能く味わうことは出来ぬ。何かなしに称名の声が出る。

此の称名の出づる原動が矢張り霊性に渇く自然の要求から称名と衝動する声である。是やがて懐かしき母の慈顔を瞻むことの出来るに至る過程である。

されば如来の本願力は衆生に仏性が具つて居る是を養い育む時は必ず仏性が働けるようになり得らる。それで本願の霊力は念仏する心に加わりて漸々に霊徳を養いて竟には霊に養われたる心にてミオヤの慈顔をも瞻るようになり究竟する所はミオヤの全きが如くに万徳円満の仏としてたまわる慈悲である。

愛の発達

人の精神中に愛ほど美なる馥わしき物はない。人の母と子との間に、人の親の心は闇にあらねども子を思うみちに迷いぬるかな、などと詠われ、実に子を愛する親の情緒ほど強き力を持って居るものはない。世には臆病なる婦人ありて我屋内さえ闇くて

は僅かの時間も居ることは出来ぬと。然るに一人の愛子が九死一生と云う場合には可畏も怖しいとも思わず闇夜丑の刻参りしても吾子を助けたいと云う。実に愛の力は強いものではないか。然るに此母子の間の愛というものは児が生れ出るや否や直ちに斯くばかりに可愛きものかと云うに恐らく然らざらん。愛は母と子との日夜に接触する所に追々に暖まりて竟に異身同体の愛と云う強き力ある感情と為りしや明なり。

我等が霊性に於て如来に対する愛慕の念も亦爾り。世には天才にして始めて宗教上の客体なる如来の大慈悲無限の霊徳に在すを聞き奉りて忽ちに禁じ難き愛慕の念を発する如きものあらんも、そは異数にして概して云わば朝暮礼拝しまた讃歌を聞き称名し漸々に愛楽の念を養い、竟には割断つことも出来ぬ愛の生命となり、如来に対する霊恋愛念は益々向上するものである。

愛の養い

最も高等なる愛、神と人との間に於ける如きの愛は言わずもがな、人類の愛なるものは愛の先輩者に依りて愛を注ぎて養わざれば人情上の麗わしき愛情は発達せぬと云われて居る。或学者の話に人類と他の動物とが母より分娩せられて成長期に母の手を離れて独立する迄の時間が、他の動物に比して、人類は母に養わるる時間の長きを要するは何故なるかと云うに、人類は啻に形体を成育するのみに止まらず、精神中に最も高等なる愛情を発達せざる可からず、此の愛という情をば母の愛情を注ぎて同化発育を要す、故に人類は他の動物に比較して母の手を離るる迄に長時間を要すと。若し夫れ宗教的の最高等なる理想の愛なるものに至っては益々長時間に渡りて高等なる感情を養うにあらざれば宇宙最上位の人格顕現なる如来を愛する迄に向上せじ。

如来なる御親は衆生を愛する慈悲の甚深なる、如来は無縁の愛を宇宙に充満せしめて常恒に衆生を暖めて愛化したまう。若し人真実に如来を御親なりと信ずる情緒にして端緒が披きて、此緒が如来の大慈悲に接続することを得ば常恒に如来より流れ出

る愛の甘き甘露の泉は我霊に注がれて念々に心は雲井はるかのあなたに憬がれて憶念して止まざるに至る。

生命のある宗教心は最も円満なる万徳豊備して微の欠点もなき人格的の尊体を要求す。自ら全幅を献げて絶対的に愛し上つるべく敬うべきが故に。

如来は絶対の愛を注ぎて我を愛したまうとの信仰ありて初めて真実の愛の信仰は成立す。

生育の親縁

親縁とは如来の慈悲心と衆生の感情的信仰との感応最も親密なる関係なりとす。人の生理上最も親和愛念の深きもの親子の関係なるべし。此の身体は本父母より分身せしもの父無くば能生の縁欠け母なくば所生の縁欠けん。父母我を生み我を養う。其の

恩愛最も深し。

親子の親密なる如く吾人は心霊に於て父母あり。如来は即ち一切衆生の大なる父母なり。吾人は全く如来を以て父母とす。吾人と如来とは親子的関係に類すべき心霊に於て親和の関係あり。

如来が一切衆生の為に父母たる因縁を明さば、如来本一体なれども衆生の為に三身となる。法身、報身、応身、是なり。

法身は天地万物の父母即ち一切衆生の最終原理の父母なり。そは法身は一には一切万物の一大原理なる故に。二には因縁相関の統一根底の故に。仏教に法身を父とする所以は法身は一切万法の拠る法とする処、この天則を離れて衆生の生ずべき理なし。法身は因縁なる天則により個々の父母なるものを規定せしめて子を生ぜしむ。世の父母たるもの自ら子を生ずと云うとも、其の実は因縁を規定する天則によりて生ずるものなり。故に天則は一切の個々の父母なるものに同一の天則を以て子を生ぜしむ。一

切衆生は悉く天則に生ぜられたるものなりと云うべし。

次に法身は万物衆理の統一的根底としての父たり。謂く仏教にては宇宙全体は一の法身如来なると共に一切衆生物々個々は法身の分身なれば悉く小法身ならざるはなし。微小なる草木もまた公々なる蠕動の類に至るまで悉く小法身なれば皆小造化の用あり、例ば鶏頭花の草を造化するは鶏頭花の生殖作用より種子を結びて其の種子より出来たるものが其れになり、凡ての動物のいかに微小なる蠕動の類までも各其子を造る造化の妙機を有す。鼠にあらざれば鼠を造る能わず。人にあらざれば人を造る能わず。一切の生物は各小造化の機能を有せり。然れども其の妙用の極に至っては一大法身の統一的全体の力を離れては成ずべきものにあらず。

統一的全体の力を離れて成ること能わざる理は例えば人の眼耳等の五官五臓六腑は各自の機能的作用をなし得るも身体という全体の統一的根拠を離れて其の職能をなし得ぬ。眼はこの身体を離れて独立に視覚のはたらきをなす能わざるが如く、また活く

べきものにあらざる如く、たとひ微細なる生物をも地球のみにては造る能はず。太陽の光熱の力を藉るにあらざれば地球は一生物だに生活せしむること能わざるべし。また太陽は全宇宙の関係を離れて活くるものにあらざらん。而して万物の統一的全体は如来法身なり。

また人の身体は有機体にして無数の細胞を包括し、また人の精神はそれと同じく総ての精神活動を包括する如く、世界の万物は地球に包括せられ、又地球は太陽系の一なるが故に地球は数多の惑星等と共に太陽系に包括せらる。天体無数の星宿は全一の宇宙に包括せらる。宇宙全一は即ち如来法身なれば一切万物は法身全体の力を離れて生存し得べきものにあらず。故に法身は万物の唯一の父母なり。しかれば旷々たる天を戴き地を踏み太陽に暖められ新鮮なる瀁気日々の糧食に至るまで皆法身の賜物にして即ち大なる父の子を育くむための備と云うも然らん。我等は天に仰ぎ地に俯して大なる父母の恩恵に感謝すべきなり。

宇宙全一即ち法身如来にして常恒不断に存在し生々活々として一切万物を生ず。

若し天地万物は法身を以て一大父母とせば、如来は一切衆生を法身の理法に随って生ず。然れば衆生は其の子なりと云わん。大なる父は一切の子を産出し生存せしむるに終局の目的あるものとせんか。また目的の設定なく唯偶然の結果と云うべきものとせんか。

答えて。斯る問題につきては、絶対無限なる神の聖旨を、数ならぬ殊に智慧の眼なき生盲の如き吾等が測るべき問題にあらず。然れども如来に一切衆生を智慧と慈悲との光明を以て摂取し給う本願力ありとする時は吾人は世界の生物進化の過程は如来が終局目的に進ましむる理性と信ず。しかれば如来が天則に随て万物を生存せしむるはついに吾人を聖旨の如くにならしめんとの目的ありと信ず。

法身と衆生との親子的関係はあまり広博なるが故に何にしても吾人が其の目的を目撃する能わず。故に漠然たるが如き観なきにあらず。今暫らく人の親子的の関係をも

て例して法身の衆生に対する目的を述べん。

例えばここに父母が其の子を養うに世は益々進歩せり。現代父母が子を養うに先づ児の生るるや母は其の子の養育の為に哺乳就褥衣服のために労し養育に必要なる物として悉く父母の手に藉らざるなし、其の母に就て云わば胎内十月の憂苦より出生後の哺養乃至養育につき百般の手を尽し悉く父母の力なり。然り而して児すでに就学の年齢に達すればまた父母は日々の食物時々の衣服すべての装飾品に至るまでを調べて而して日々学校に通わしむ。児の就学に就ては日々肉の生活に必要なる衣服食物等は是れ人の生活にはなくてならぬ物として父母は之れを児に備う。然れども児を学校に通わしむるは衣服等を目的と為すにあらずして即ち人格を造るべき智能を啓発すべき事業を目的とす。若し児童が学事を勉めずして唯日々糧食を事とするのみにして勉学せざらんか児は不勉強の結果ついに試験の時に至って落第という不幸の成績を見るに至らん。

文明の時代には人は他の動物の類らが自己の栄養と種族を保存する生殖との生活のみに止らず精神生活を営み学校に就て智能を啓発し宗教によりて霊めらる等の最も高等なる精神生活をなして初めて人が万物の霊たるべきが如し。今仏教に於て法身の天則の理法に由りて一切衆生を生産し保存し、恰も天地万物をもて生物を生存せしむべき自然の備えあるは、父母が子の為めに衣服飲食を備えて肉を養うが如し。智能啓発すべき勉学がなくてはならぬと同じく人の心霊を開発し霊能を発達して聖き霊となりてついに目的として即ち成仏得度することを得るは宗教の所謂終局目的なり。若し人々斯る高尚なる観念なく理想なく唯肉の生活のみをもて目的とするが如きは、児童が学程の勤勉を意とせず唯糧食を事としてついに落第すると同じく、人生肉の生活のみを旨として霊の生活に入らざらんか、ついに宇宙真理の目的なる真国に入ること能わずして、其の精神は真理の為めに捨てられ即ち三悪道に堕落すべし。即ち是れ人生の学校にて落第せる生徒なり。只弁当のみを弁じて学科を勉めざる生徒なり。

法身の親が天地万物の準備を以て吾人を生存せしむるは豈肉の生活を目的とするものならんや。然らば衆生の終局目的に随うべき時には如来はいかなる性能を以てか吾人を摂し給うぞ。

如来は本一体にましませども衆生を向上せしめ終局目的に摂めて光明の霊界に成仏せしむる時は報身如来と名づく。報身如来は智慧と慈悲との光をもて衆生の心霊を開発して仏知見の眼を与え悪質を脱却して聖きに美化し給う。経に如来の光明遍ねく十方世界を照して念仏の衆生を摂取して捨て給わずとは蓋し法身の力によりて生存せる衆生に対して智悲の光をもて其の信念に応じて之を救霊し給うことを示したるなり。

摂取の親縁

世界の生物の生命が益々向上し進化するは終局目的の理性あることを示す。世界の万物が天則の理に随って動きつつある、衆生の必ず向上しつつあるは、如来の目的即ち衆生を最終の真なる善なる霊界に帰趣せしめんとの目的あればなり。さて世界の過程に衆生の生命を向上して終局に帰趣せしむる理性あることは、宇宙の一分たる地球上の生物生命の進化して終局目的の理性あるが如くなるを以ても知らるべし。視よこの地球の発展は生物生命の現化の手段と云うべし。生物生命の盲目的生活より意識的生活に進み、意識的の発達は精神の向上を目的とし、精神の向上は宇宙全一の精神と云うべき如来の目的に参与せしめんが為めに、地上の生命が向上し発達し来りし如く、天則に自然にかかる現象あるは、是れ法身如来が自己の目的に随って終局の真理に帰趣せしめん理性なりと云わざるべからず。

世界過程に万物が物心共に因果律に規定せらるる此外観の因果律と内面の目的とは一体の両面なり。

手段と目的。法身が天則によりて一切の衆生を生存せしむるに手段と目的とあり。即ち人の肉体的生活と霊の生活なり。前者は後者の為めに手段なり。神は終局の目的として聖き生命として神性に摂めんとするにも肉体生活に依らずして独り霊の生活を営む能わず。しかれば本より肉体は不必要なるもの或は還って邪魔物として排斥すべきにあらず。手段としては必要にして此の身体によりて霊の霊たることを現わす器具なり。然れども衆生ややもすれば唯肉の生活を以て目的の如くに観じ肉の満足のために精神を犠牲とするに至っては肉は罪悪の器具となる。而して人本より肉の生活が手段として必要なりしがために肉に満足を与え充分に発達せんとの惰力のため、ついに真実深奥の意義ある霊の生活に進入することを顧みざるに至っては全く手段を以て目的を誤てりと云うべし。

人の精神に伏蔵せる心霊が如来の心光によりて開発し而して従来の肉我の垢質を脱却して聖きに成らしめんには、百尺竿頭に一歩を進むべき霊路にあれど、無始以来の

惰力にひかれて進入することまた易きにあらず。ここに於てミオヤの慈愛の力は衆生を光明の霊界に摂めんとの目的を彰わさんがために、慈愛の化現とし目的の標準として、法蔵因位の大願には一切衆生を無為泥洹の安きに帰せしめん為めに、たとい身をいかなる苦毒の火の中に止むとも我が衆生を救わんがための行業は精進にして忍んで遂に悔いじと誓を発し尽十方無礙光如来と方便法身の身を現じ給えり。

これを報身如来となし常恒不変の光明永えに輝き唯光栄と平和のみの聖界に在して智慧と慈愛との光明は遍く十方を照し、如来をミオヤとして己れは子として救を求むるものに光明摂取の親縁となり給う。常恒不変の光明は衆生の信念を照し衆生仏を憶念すれば仏もまた衆生を憶念し給う。唯言のみに於て如来を父と号ぶもの皆親縁なるにあらず、全く中心真髄より如来を父とし慈愛の力に霊化せられ如来の心光と融合し如来の聖き愛によりて霊我と更生せしものにして全く如来を父とす。如来の聖霊によりて聖きに生れしものは全く如来の聖子なり。常に其の慈愛の光を憶念し霊

き真我益々向上し霊育せらる。

如来は真理の光をもて衆生の心霊をして皎々として月の如く赫耀として日の如く侵すべからざる霊徳となさん為めには神聖なる父たり。またいかなる艱難にも辛苦にも憂愁にも苦悩をも救いて平和と歓喜と妙楽との霊福に化し給う慈愛の点につきては即ち母の如くに感じらる。

斯る如来の慈愛と智慧との光明は一切の時一切の処に永えに照り渡れども衆生は心闇く神痴にして自ら之を知見するに由なし。無明に迷える衆生の為めに此の真理を教えて仏性を啓発し聖き子を生ぜしむる父としては応身如来これなり。即ち教祖釈迦世尊は弥陀の分身として化を斯土に垂れ給う。釈尊生涯の天職は衆生をして聖きに生れしめ霊き眼を開かしめ聖き我たるを自覚せしむるにあり。言を換えて云わば人々本来弥陀の一分子なるが故に此の真理の教を聞いて自ら弥陀を深く信じ愛して如来の心光を蒙りて自己の伏蔵を開けよ、爾らば汝等は仏子たらん、と教え給う。故に正

直に一心に仏語を信楽するものは悉く霊性開発し霊きに化す。されば経に仏子仏の口より生ずとは蓋し仏語を聞いて如実に修行して遂に自己の仏性開発して聖き人となることを得ればなり。

法身は一切衆生を生存せしむる天則の根底として、一切の理を統一し、万物を天則の規律に随って生存せしめ、一切衆生の身心の法の源として万物の父母たり。報身としては智慧を以て衆生の心霊を開発し霊き眼を与え給う父とし、慈愛を以て内容即ち感情の苦悩を脱却し、霊き我たる妙楽歓喜を得しむる母なり。

法身としては天則に理性の源として衆生に眼耳鼻舌身乃至百法を賦与する父とし天則即ち天のはたらきとして一切衆生を生活々動せしむる慈愛の母たり。

応身としては人に真理を教えて聖き霊を啓発せしむる父にして慈しみをたれて教をもて衆生の霊を育て給う母なり。

されば如来は我等が父母たるなり。

人は仏性を具するが故に是れ法身の卵なり。眼ありて能く視、耳ありて能く聴く。人の精神生命には本来正覚を成ずべき心光遍く法界を照すべき霊性の卵具われり。これを賦与せる大原則として法身は父なり。法身の父なくして吾人が精神と身体とのすべての官能の由り来りし所以やある。吾人が本能の性は即ち法身より産出されたる卵なり。仏性の卵なれば未だ天光のときを告げ鶏冠をかざり鶏王の威勢を示すに至らざるも、吾人の本能に霊性伏蔵する理はまことに是れ信ずべき理なり。

如来は天則の理に則りて衆生に仏性を賦与する父たるのみにあらず、この仏性を孵化すべき母としては如来の恩寵として慈愛の光は普く法界に周徧せり。吾等此の慈悲の暖温をつねに憶念し心々相続して止まざる時は早晩定めて慈愛の加持力によりて感応孵化して啐啄同時に仏性の開覚すべき時やあらん。友よ明らめ給え。子の精神煩悩の殻中即ちこれ如来の一卵たることを。子がためにその不測なる精神生命を賦与せし法身の父あることを信じ給え。子が為に其の霊性をあたためて感応の能力によりて孵

化し子をして聖たらしむる恩寵の母のあたたかなる慈愛の光は本より一切の処一切の時に普く充満せり。たとえば太陽の熱の普く地上に充ち亘るが如し。また如来は慈愛の母たることを一切の子等に示現したまいて報身の身を現じ給う。いかにも美しき相好は慈愛の母たる化現なり。

智慧の父慈悲の母

如来は一切衆生の父母なりとは是れ如何なる理によりて父母たるかと云うに、如来は全く一切衆生の父母たるなり。天地万物の生成化育の機能を見よ。万物一として如来を父母とせざるなし。衆生が本能的にこの精神及身体も如何なる原理より生産せられしものぞ。吾人の心性身体が天則的にこの身心を規定せる如き法身の所生に非ずや。また如来の力は天地間に生物を生活せしむべき天則すでに備わりて天地万物の衆

生を化育する所の力は悉く是れ衆生を養育する大なる母のはたらきにあらずや。吾人は能く生ずる原因を父とし能く養う原力を母とす。宇宙間に一切衆生を生産する理法の存在するは是を法身の父とし一大能力より一切万物を備えて衆生を養育する力を以て母とす。然れば即ち法身は一切衆生の父母たるにあらずや。

次に報身とは宇宙に実在せる理法にしてまた人の心霊を開発し霊化する処の性力の存在を報身の徳とす。故に報身如来は一切衆生をして終局目的なる至善円満に成仏せしむる処の父母たり。

報身如来は智慧と慈悲との光明をもて衆生の仏性を開発し霊き性を愛育し衆生をして慈悲愛化するを用とす。智慧の光明はいかにして人を照すや。今喩を以て示さん。

智と悲。智光は父たり。悲力は母たり。如来は智慧の光を父とし人の心霊を開覚し慈愛の力を母とし人の内容を霊育す。衆生を終局目的に成仏せしめ神の性徳にならん。

しむるを如来の用とすれば、如来に智慧と慈悲との二徳をもて衆生を摂化し給う父母なり。人の精神の形式と内容との二を開発し霊化し給う用ありとす。

人の精神に形式動機と内容動機あり。甲は理性、乙は感情なり。形式動機とは自己主観より客観の方へ向って活きゆく精神作用にして観察とか判断とかの如くこの理性にて外界の事物を観察し判断す。内容動機とは客観より感受して内面に感動するはたらき即ち感情の喜怒哀楽の如き理性と感性との二性なり。

如来の智慧の光をもて衆生の理性を開発し仏知見を開き如来の真境界に悟入せしめ給う方面を父とし、又如来の慈悲をもて衆生の感性を解脱霊化し給うを母とす。

人の理性は吾人が仏性本より具すれども自分の本能に其の霊性を具すれば其れを教示利行によりて開発せしめなば自己の伏能が開発して普く十方真理の霊界を知見することを得。如来四智の光明は衆生の観念と理性と智力と感覚とのすべての形式的方面を開きて衆生に如来の真境界を知見せしむるなり。委しくは近縁の下に於て知るべ

し。今は如来の智光が衆生の霊なり知力を開発し真理を悟らしむる故に父なることを明さんが為めのみ。人この霊性は法身の父より本能的に具わりしも若し報身の智光によらざれば開発するに由なし。例えば科学知識に於ても本能的に智能有すれども教養にあらざれば啓発するに縁なきが如し。報身の智光が其霊性を開発して始めて本覚の霊性開発す。これを始覚と名く。ここに初めて其の顕動に於ては初生せるが如し。故に顕動の方面より云わば報身の智光を吾人の父と名く。

報身の慈悲によりて衆生の内容即ち感情を融化し給う。さて人の感情なるものは本肉我に基きて憂悲苦悩多く、この苦悩多き人生をいかにして度すべきとならば、是の苦を抜き楽を与うるが如来の慈悲なり。

人の天然には恰も璧が璞垢につつまれるが如く心霊はすべての悩多きものなり。されば苦々、行苦、壊苦なりと云いて人は本来苦を自然に受けたりしが之がまた種々の苦が群り来るを苦々と云う。

愛の感応

念仏三昧の法とはいかにまたいかん。斯の三昧を行ぜんとならば如来は是一切衆生の為めに慈悲の母なり。常恒に慈愛の心は遍く覆い至らぬくまもなし。之に対して衆生一心に如来を愛慕憶念して止まざる時は衆生の愛心と如来の愛心と感応融和して三昧を得べし。今念仏三昧相愛相憶の心を喩を以てのべば、爰に一人の母に深く愛せる一子あり。朝夕に鞠養し日夜に離れず。然るに其児幼くして遠く他処に遊んで一旦路を失い竟んぬ。他郷貧里にあり。年を累ねてまた値遇するに由なし。可憐にもかの子遂に乞食の党に入る。この窮子日々人の門戸に立ちて飯食を乞う。衣は形を掩う能わず、食は僅かに命を支う、飢寒困苦殆んど人理当に絶えんとす。窮子窮餓に瀕しひそかに思惟し幽かに往時を偲ぶ。愛母の膝下に撫育せられし時を追憶し当時母の愛を被

りしこと今此の飢餓とを思えば今更往昔の愛母の膝の下の恋しさ熾然として燃るが如くに起れり。一念母を恋念せしよりこのかた憶念不断にして胸臆に離るることなし。母また子を遣いしより常に子を哀念して忘る間もなし。而して其母の子を憶念すると子が母を憶念すると、雙方の念々相感ずる時、彼此感応同交して現に宛然として目前に在るが如きを見んと。

念仏三昧を行ずることも亦是の如し。如来の大なる慈悲は衆生を愛念し給うこと常恒不断にしてまた自然なり。喩えば太陽の光明無限にして常に照すが如し。如来慈悲の光明無縁にして常に照す故に不断なり。我等が常恒に如来を愛慕憶念する時は一切の時に於て相応す。故に念々に憶念し心に愛慕する時は彼此感応して現在に於て如来を観見し奉ることを得と。これを念仏三昧と名づく。若し此の三昧を得れば心々常に仏を離れざるが故に如来の慈愛の心光は行者の心念に薫習し凡夫の心も変じていつか聖き心とはならむ。譬えば薫香を容れおく時は其の香器もまた香るが如し。仏心

が凡心に薫ずる時は凡心また聖心と化す。

霊育

初声をあげて未だ旬日もたたぬ稚子が籠の中にスヤスヤと寝入りし姿のいかに可憐きぞ。此の嬰子ハッキリと眼は開けどもいまだ親の面だに視わけず、耳は物の音を聞くこと能わずして、いまだすべての感覚発達せず。飢えて食を要すれども食を与えよとも言うことも能わざるほどは、いかに其の要求を満すべきぞ。嬰子は唯呱々と鳴く其の声を聞いて母は乳を哺ます。

我等はこの乳子と同じく法身より賦えられし霊性は伏蔵すれども霊のみにては霊眼未だ開けねば霊き母即ち如来の慈愛の面かげだに観ることの応わぬ身唯慈愛ふかき聖名を称うるのみ。請求の称名とは之にあたる。

請求は心霊の糧たる聖霊即ち慈愛に充されんことを要求するなり。人は其の内容に霊に空乏せる故に卑劣なる唯肉の満足のみを追求し肉慾の餓鬼とはなりぬ。

不断に請求して愛念し聖きに憧れ霊に恋念して霊き糧を以て養う時は心霊増長しぬれば小児が月を経て母の面を見わけ得るが如く、霊の母たる霊の面かげを認識し得るに至らん。現に慈愛の懐に安じぬるを自ら識るに至らん。

人々一日一夜に八億四千の念あり。念々いかなる精神活動しつつあるぞ。君よ君は念々何を念いつつ日を暮しなさるるか。仏教にてはただ三毒五欲のみに念がはたらきつつあるを三塗の業とは名くるなり。

人は心の内容は肉我の幸福を貪ぼる動機によりて活動しつつあれば、念々貪欲瞋恚五欲の念のみにして唯肉我のみが増長し、ますます抗進するは、例えば煙草酒などの如き、一定の快楽は度かさぬればついにその感受性痲痺する故に同量の刺激にては之を感ずるなきが如く、如来の慈愛を感ずる念に於ても念々慈愛を念うて益々抗進する

結果として其の内容真情に於て霊の結核をなす。この結晶が原動となる、之を聖霊と云う。この聖霊は即ち親の子、聖子なり。此を以て此の霊の結核より発して霊的活動をなす。此の霊の原動より衝動する処の念々は悉く霊の分子なり。

人には肉我と霊我との二面存せり。
親縁の主体は人の心情の如来に対する霊恋是なり。
愛慕即霊的恋

異性相愛

人の心には肉我と霊我との二面存在せり。肉我なるものは同気相求むと云う如く同性相愛は自然の理ならんかと思うに事実は然らず。異性相愛親和は天然的に生理の規定として存せり。

衆生と如来とは同一の法身を体とすとせば理性に於ては相方致一すべき理なるも、本質内容に於ては如来の純浄たる聖霊的なると衆生の煩悩汚染なる心情と此正反対なる異性が如何にして親愛相和の関係を可能にするやとの疑問起らんかなれど、此反対なる両性が還って相愛密接の関係を希求する性能の存する事は生物の異性即雌性と雄性とが同性に対するよりは却って異性相愛親和の密接なる関係をなす性能を有する例に於ても知るべし。

而して異性相愛の性能存することは肉我が自然の生理的に規定せられたるより生じ霊の生仏相愛の性能存することは神的宗教的霊的規定の天則なりと云うも不可ならざるべし。肉我が異性相愛なるものは生理的衝動より生じ霊我が神の霊を恋愛する情は霊的衝動より発る。

人には肉我と霊我との二面ありて肉我の感情のみを完全に発達すとも霊我にして発展せざらんか他の動物と何ぞ択ぶ処あらん。

肉我の感情が異性との相和を求むるは生物の天性なると亦動物の祖先より襲い来りし遺伝性とあれば人に情の存するは言ずもがな而も之が為には此慾心を満たしめんが為には全力を尽して求むる事は凡ての動物に於ても知らるべし。

人は肉我よりは尚一層高等なる霊我の生活とならんには、此の対象となるべき衆生と、異性なる如来の聖霊に感接して此の霊と相愛親和の関係によりて霊の生命に入るにあらずや。

霊我が如来の聖霊に感接せんとの愛恋は霊的衝動霊的憧憬として現わるる。此霊恋感情こそ、如来の聖霊と相和霊的交感して霊の生命に入るなり。此霊恋という感情こそ孔子が賢を賢として色に易えよと言いし言は好色を愛する程に賢者を愛慕せば己も亦賢者の同侶たらんとなり。

異性を恋愛する程に霊を愛恋することあらば必ず聖霊に感触すること焉んぞ夫れ難からん。左れば聖法然は、

「かりそめの色のゆかりの恋にだにあふには身をも惜みやはする」

世の人々は肉我の有限なる仮初のことにも甚しきは身をも命をも忘るるものさえあるではないか、況んや霊の無限の霊福と永恒の生命となるべき霊界に霊我の感情を満足し得べき対象を求めて止まざる時は必ず得らるべきものぞ。

法華経に「衆生已に信伏し質直にして意柔軟にして而も恋慕を懐き一心に仏を見んと欲して自ら身命を惜まざれば大愛の化現たる仏最も麗しき可楽見其身を現じて為に説法す」と。

如来の霊応身なるものは衆生が一心に如来を見んと欲する霊恋の強き力が法身との感応によりて客体化して現ずるものにしあれば聖霊を愛恋する結晶とも云うべし。

如来は本来このかた第一義諦 清浄 智慧の相として宇宙に満るとも衆生の霊恋あらざるよりは霊応の妙相現ずべきなし。

如来の妙色身は大愛の化現

肉と霊とは本より清濁天懸するも亦自然に同一形式存する様に思わる。

生物進化の理に、生物なるものは原始劣等なるものが次第に進化し来って現在の人類の如きにまで到れる原理は自然に生物を淘汰する自然理法ありてなりと。亦雄雌淘汰の理法とは生物の雄性なるものが異性を求むるに異性の愛を購わんが為めに専ら勤勉したる結果累代に発達して美を呈するに到れりと。異性の愛を得んとの性力が愛を得んには善にあり。或は色の美、声の善、鳥類に云わば孔雀の尾鷺の声の如く皆異性の愛を購わんとの性自然より淘汰せられて発達したるを雌雄淘汰の理と云うなり。

月竈天懸せる神人の関係に於いてもそれと相似たる例を見る事を得べし。

宗教的客体なる神の表象たるものは最勝最美の一切に超絶したる妙相を以て其の身を荘厳して衆生に対面す。而も衆生に対して最強度の愛慕を惹起すべき動機即ち宗教的霊恋の対象者たり。

如来妙色身、世間無与等、無比不思議、是故今敬礼。如来色無尽、智慧亦復然、一

切法常住、是故我帰依。如来の勝応身は八万の相好光明遍ねく十方を照し満身の愛を以て衆生の信愛を照覚す。

如来は本第一義諦智慧の相なれば、世諦の相としてこぼるるばかりの愛嬌の姿を以て衆生に対する理は無いなれども、如来の活動力なる大愛は凝然真如または無相寂滅と云うべき非動の物にあらず。如来の妙色相は愛の権化なりと云うべし。如何にせば衆生の信愛を得べきぞと全力を尽して衆生を求むる様に吾人の感情には感じ得らる。

如来の本体は一切諸仏が同じく証覚の智見を以て相見る時は平等理智彼此の相なし。若し一切諸仏は同じく如来法身を体とし其内容に於ても全然一致したるものとせば同気相求め仏陀はまた仏陀を求めて相愛の力を注ぐべきに左なくして、却て其性質の反対せる凡夫汚濁の衆生を求めて親和力を注ぐとは何ぞ夫れ奇なるや。

是また異性相愛の宗教的理性の天則と云うなるべし。

如来は本第一義諦にして世諦の相は離れたるものに在せども唯一切衆生を愛する処絶対的愛として衆生に対して満面の愛を表して衆生に求め玉うと云う事を信知する時は吾人が宗教的衝動は大なる愛との親和を得んが為に霊的憧憬として一に神を愛慕して之と交感せんことを願うは是宗教的要素に豊富せる感情即ち宗教的天才に於ては殊に然るべし。

古来プラトー的の恋などと、是れ霊の憧憬霊の恋なり。若し霊恋の深き感情にあらずば最親密なる感情調和は難かるべし。

霊界の偉人宗教的たるもの感情は実に一種言う可からざる霊恋の不可思議的感情なるものが、精神真髄に存して赫々耀々として活動し、理想を高尚なる神の中に投影し身は茲に在って想は美天国に逍遙する如き、竜樹天親の頭上には化仏常に耀々と光を放ちしならん。我聖源信が「ぬれば夢さむればうつつ束の間も忘れがたきはみだの面影」とのたまえる此聖者の宗教的感情霊的憧憬は知るべきなり。大愛の権化たる霊

力は聖者の胸中に往来し活躍し耀々として光を放ち実に斯る不可思議なる霊能こそ是全く高僧を源信如来とまで衆人が帰依を払うべき霊格化し給い来りしなり。聖法然が

「我はたゞ仏にいつかあをひ草心のつまにかけぬ日ぞなき」

「あみだ仏と心は西にうつせみのもぬけはてたる声ぞすゞしき」

仏陀の愛は斯る感情の中に宿るべし。如来の霊は此の霊的衝動に在って活くべく、斯る感情こそ如来の霊を請ずべし。霊界の偉人と呼ばれ宗教界の豪傑と称せらるるものに斯る経験なきもの無かるべし。彼の一休宗純なる僧あり。洒々磊々彼が如きもの少なからん。彼は世の名利に対して無頓着なるに拘わらず宗教的感情に富める事を知るべし。

世に一休譚あり。本々譚なれば後人の作かは知らず。然れども彼が求道者としての修行中のものは彼が宗教的感情を穿ちたる如し。彼青年の時専ら座禅し工夫する時に鬚髪長くのび顔色憔悴せり。時に信者居士等が之を愁いて医師をして診察せしむ

るも曽て異状あるなしと。在俗の輩弥々之を憂思し謂らく和尚年青壮若しは世の青年を煩わす処の恋なる神の業には非ずやと和尚の身を惜しくや思いて問ければ和尚竊かに紙筆によりて其の実を陳ぶ。

「本来の面目坊が立ちすがた一目見るより恋とこそなれ」

「我のみか釈迦も達磨も阿羅漢も此君故に身をやつしたれ」

他の人恋という事は性肉的愛恋のみと知るも霊の愛恋こそ霊界の偉人を産出する原因なる事を知らずや。

此の譚に記する処全く一休和尚の宗教的感情を露発したるもの又何人か此の霊恋に依らずして霊界の美人に接触することを得べき、本来の天真仏は見る事を得じ。

霊の恋

世に極端なる利己主義を主張する輩あり。彼等は謂らく凡ての生物は利己を以て本

能とし己を愛する外に他を愛するの本能なしと云うは余り極端ではないかと思う。人類には本能的に一種不可思議の感情がありて人の精神生活の中心に伏在せるに非ずや。彼は、我と彼自と他とを同一視し異身同体の如くにまで利害を共にする能力あり。是何ぞや、愛なる者是なり。

此愛なる者は最も強き感情の糸を以て我と彼とを維繋す。普通はこの感情の最も強き者は親と子との間に亦異性の間に現ずる者に於て然りとす。

生理の自然に約束せられたる異性の親愛は最親密なり。然れども客観的に形を異にしたる異性の間に見る処の親密なる者よりは尚一層深く彼我の親密なる感情の存する事は宗教的感情即ち神に対する霊の恋愛なるものに発見すべし。

斯る宗教的感情が神秘的に神と合一し小我と大我の冥合せる如きは人と人との相愛の夫れよりは親密である。

小き我が無限大なる真我と冥合する事を得。霊恋の愛なるものは純潔にして清浄

なり。神を愛し神に愛せらるる此の相愛の関係より出来る愛なる者は、肉我の愛とは異にして神より愛によりて愛化せられ又博く一切の衆生を愛する仁愛となる。

如来の相愛々化は親霊の中心にして是心情の信仰と云うべし。此の如来の愛と融合し得る先駆としては感情の愛即ち霊愛である。霊を恋愛する感情なり。

此霊恋こそ宗教的生命に入るべき発足点なり。霊恋なくして神人交感の妙を得べきなし。神人交感は人の心霊を神の霊と融合して霊化する妙契機なり。

霊恋は人を神化する

絶世の英雄も肉の奴隷となり肉我愛恋の為に斃さるる事を免れざるは無明の雲心にさえぎり罪悪の種子内面に伏在すればなり。

宇宙洪漠なるも世界広大なるも以て精神を照す光明にして無からんか、霊の偉人が出世せざらんか世は闇暗なり。宇内をして心光普く照し一切の心霊を度脱する処の聖者は出たり。斯る聖者は肉の愛より生じたるものに非ず、斯る聖者は霊の愛により

妊娠せられたり。

思うに其身は四海を保ちて万乗の高きにあり天下の栄耀を己一人に聚め金殿玉楼に身を安んじ珍宝瓔珞に膚を飾り三千の後宮は間断なきまでに娯楽を供し深閨は最も愛情を濃にすべき皇妃は天下に亦なき艶姿と賢明とを共に備わり満腔の愛敬美を以て常に側に侍るあり。加之玉の麗しきを呈せる愛子を已に設けたる恩愛の情寡とも深き処の父王。いかに悉多太子の要求なるか。

肉によるの愛は麁なるを観じ霊によるの親愛の妙なるを慕い人間界中またも得べからざる位もまたなき栄花をも破れたる履の如くに捨てて専ら霊界を愛恋したり。

若し肉我の生活としては又之に加うべきあらんや。斯る恩愛の情をも顧みざる太子は人格の要素たる感情なるもの欠けたる冷酷なる人なりと云んか、否決して太子は人格に於て欠点ある人にあらず。平凡の人よりは寡豊富に寡円満なる人格なることは言までも無らん。然て彼の賢婦ヤスタラを愛せざるに非るべし。愛子ラフラを思わ

ざるにはあらざらん。又父王の恩愛を感ぜざるにはあらざらん。されどもよりは〳〵最も深く最も厚く愛すべく恋うべく慕うべき者あればなり。

瓔楼にありて百千の婇女は麗きを競い芳きを争うて各百般の伎芸を尽して太子の歓楽の器具を奉るも、敢て楽とせざる太子は玉床に坐して沈思黙考憂色に堪う可らざる者に似たり。如何なる天の伎楽も楽とせず如何なる珍膳も亦甘きを覚えざるが如く唯鬱々として而も寝食を忘るる迄になり給いぬ。抑是何の為ぞ。

抑も美壮年なる太子に豊富なる感情なるもの精神的中心に存在し理想あり恋愛ありとせば太子が理想せる処の恋愛の対象は是那辺ぞ。若し無明闇痴の雲はれて本覚真如の空清き

舎那円満の月の顔、見まくほしさに恋すなれ
一度び肉の我となりし、罪の衣を被し身には
慕う心は深けれど、逢坂の関越え難く

是だに称わぬ世なりせば、活き存うべき甲斐やある
狭き心にあらなくも、深き思いに沈みける
堅き心の一筋は、巌岩をも徹すと聞からは
金剛不壊の意志をもて、恩愛繋縛の綱を断ち
娑婆即常寂土、舎那清浄の法の身は
妙なる姿妙にして、現在説法と聞きつれど
肉の心につつまれし、無明の雲に覆わるる
此土と彼土とは一重なる、無明の雲ぞ隔つなれ
されど濁りの世になえて、塵のちまたを立ち出でて
しずけき山に入りてこそ、霊き国は開き見ん

世を去りて太子今は先づ身の繋縛を解れたり。誰を媒介と頼みて我理想せし霊界の美人を我が物にせばやと。時に名にあう老仙あり其名をアララと云う。太子は此老仙を訪うて己が所願を陳べにける。抑此老仙は年壮にして世を遁れ修道行法功積り

あらゆる仙中の仙なりとかや。

太子此老仙に己が所願を陳べければ老仙は威厳神の如く炯たる眼光は電に似たり。権威ある声を以て謂えらく、嗚乎壮年なる求道者よ汝真理の霊界に入て真天の面目を見んと欲せば先づ従来の有し来りし迷妄罪悪の心を脱却せよ。肉の我なるものは罪悪である。罪悪の源は迷である。迷の源は冥初である。此の冥初の雲はるる時は四禅の空は澄々として清らかにならん。

汝知らずや無窮の蒼天に日月星辰の燦然として光を放つは是四禅天を掩う処の幕ならずや。汝が冥初の心の迷の霽る時是幕は自ら開け非々想天の殿顕れん。

斯の非非想こそ宇宙最頂の処にて此に比すべき天はあらじ。汝が理想せる処のもの果して茲に得べけんと。

太子即ち道士は老仙の教に随いて寂莫無人声の床に坐して深禅定に入にけり。さすがは天性叡智深遠なる太子は老仙が数十年間励修苦行の結果として獲得したる四禅の宮殿は未だ数日間を経ざる程に正に得たり。太子今は冥諦の雲はれて四禅の空は澄渡

りて非想の天は朗らかに顕われたりき。然れども太子が曽って理想せし如き真如の面影としも見えざれば遂に本意なくして老仙の許を辞し去りぬ。

太子は熟々思惟すらく、仰宇宙最終の真理を極め、宇宙一大本源を明し、秘密の荘厳殿を開き舎那円満の月の面容を見まくほしくば蓋し余所にな求めそ。いかにとなれば宇宙の真相はもとより已来清浄なり。但し衆生自ら無明の覆う所となりてこそ本覚自性の天宮を隔つるなれ。自己心源に達し一切迷妄の断尽する所自から自性天真の妙なる姿は現わるべし。舎那円満の月の容に接すべし。理想は高天原にさやけき月を訪れど、然れども、正に其霊象に接するあらざるよりは争でか内心の安きを得ん。

一心一意金剛の志なる菩薩はマガダ国なる菩提樹下金剛座上に坐を占めて深三昧に入て神を凝し精を練る。若し我れ正覚を成ぜざるよりは寧ろ死すとも動ぜじと。神は三昧の牀に深く、深禅定に入りて益々微かに弥々幽に偲び入る心の奥はふかけ

れど無明の闇に隔てられ一心に自性天真のあなたに憬がるる。金剛の霊き心のいと深き処に爰に於て一の魔軍こそ起り来れり。そは他にあらじ、無始以来添い来りし肉我の愛なるもの、将に断ぜんとするに先だち永き暇を告げんとし、いまわの一刹那謂ゆる燈の将に消えんとするに熾然たるの諺に同じく、永く滅尽せんとするに肉我の愛や招きけん、亦は聖霊に全生活は奪略せらるるを傷み肉我の為めに一度回復の軍を催しけるにや、金剛定に入りて當さに妙智の宝鑰をもて秘密の門を開きて法界宮に入らんとするに、自己の心情より幻出しけん、亦外界より来りけんかは知らず。忽ちに天より一朶の妖雲は靉靆として起り、忽爾として現れたる怪の姿、法界宮より舎那の天使のそれならで、如何にも奇しき女の面かげ華の顔、雲の裳、妖姿衒惑、一笑は百の媚、一たび顧みれば城を傾く、此天女の眩惑に罹るもの縦令三軍の帥も争でか魂を奪わることを免れん、若し肉我をもて主とするもの智と言い勇と云い此が為に敗を取らざるものやある。偖爰に於て考うべきは人の精神に肉我と霊我と共に宿れり。

霊我が能く肉我を制伏して聖きに向上する士を菩薩と名付く、若し肉我にして霊に勝つ時は忽に全精神は妖魔の為に奪略せられん。三の魔女は種々百般の秘術を尽して菩薩を眩惑せんとするも遉はマカサツ、決して其の羂に懸るの怖あらんや。菩薩自から警悟す。汝宇宙に充る処の妖気魔風がいかに力を尽して我を誘惑するも争でか我を動かすべき。時に菩薩深く三昧に入って聖霊に充され、自から醒め来りて観ずる時は、胸中に彷徨せる肉我の迷雲を吹き霽して観ずる時は、目前に彷彿たる魔女の幻妖桃李盛なる色天上天下に二なき美色とは肉我の生理に規定せられたる愛という魔力あればこそ、若し肉我の魔酔が聖霊に充され醒め来りて観ずる時は未だ央ざる芙蓉と已に萎縮せると焉ぞ夫れ異らん。

肉我は肉愛に充さるるが故に花の顔玉の膚に迷酔しぬべし。若し心機一転して聖霊に充され迷い醒め来りて観ずる時は老衰せる婆女と何ぞ異らん。何の迷うべきなし。

ボサツ初め暫く肉愛をもて見るが故に妖姿に価千斤、心機一転し聖眼を以て観じ来

れば傷むべし老婆子。菩薩は一心に如来親縁なる慈愛の光に胎れる聖き勢力をもて肉我の主を降伏せんとす。我見の城廓は已に没落せんとするに際し、無始以来横領し来れる主我は聖き我に降伏せんとのいかにも残念にや有りけん、主我の大王と仰ぐ処の天魔の軍勢を藉りて飽くまでに防禦しまた逆襲せんとし、忽ちに闇黒の颶風百千の雷電天地破裂せんばかりの修羅場は現前に演出せられたり。爰に於て菩薩は思念すらく汝ら魔王及び魔軍らよ、若し我れ肉我が主たらば我もまた汝が眷属たり、汝が命令を奉ぜざるを得ず。我は已に肉我を降伏して聖き我に随わしめんとす。縦令悪魔らが百千の雷を鳴らし千万の颶風を吹き起すとも天空さやかに照り渡る月には障りあらざらん。聖き霊なる声は心の耳にさゝやきける時忽ち雷霆響を収め電光消え迷妄の黒雲はかき消す如く無くなりぬ。

時雨の吹霽したる後の空はいとさやかなる月の光も一しお色勝り天の清き灑うが如く牟尼は寂然として禅定に入り三摩耶の宝鑰をもて涅槃城の門を開き、無上菩提の宮

殿に入らんとするに、東の天に明星の輝き出る頃おい、閃然として眩しきばかりに輝き来る光こそ自性天真の天使なれ如来親縁の光なれ。忽ちに天開け地闢け曽て見来りし処の乾坤は跡を伽耶の霞と消えて、従来昼と見し世は夜とも覚しく、聖き真実の曄瞳とはなれり。肉眼に見し狭き宇宙は跡たえて真の宇宙は顕われたり。靉靆として彩雲空に聳え香風馥郁として四方に薫じ天華紛々として空に飜り諸天楽を奏して心王の美徳を讃ず。

心眼開き来りて観ずれば蓮華蔵世界法界宮に廬舎那如来、尽虚空界の身に塵沙の相好を備え一々の相好よりは無辺の光明を放って普く衆生の信念に応じて利益を与え給う。

欣慕は自然悟道の密意

大原談義に曰く人をして欣慕せしむる法門は暫らく浅近に似たれども自然悟道の密意は極めて是深奥なりと。

導師観経疏に観経に釈尊が彼の如来の依正二報荘厳の相を説いて人をして欣慕せしむと。

如来真身は玄深難思第一義諦にして一切に超絶せり。然れども衆生を愛する大慈悲の理性より無上の愛が無上の妙色身相と顕われて衆生に応じて現じ給う。

如来は八万の相好上もなきうるわしき相をかざり御名を普ねく聞えしめて衆生に愛慕の念を起さしむ。

高尚なる理想と神霊的好象として繋想恋念せざるものなかるべし。

聖法然尊者は「我はただ仏にいつかあふひ草心のつまにかけぬ日ぞなき」と。聖源信尊者曰く「ぬれば夢さむればうつつ、つかのまも忘れ難きは弥陀の面影」と。

如来は愛する衆生を恋うる事の深きより無上の相好をもて衆生をまち給う。衆生は

愛慕の誠をもて如来に観せんと楽欲す。

聖法然尊者は霊恋の深き寤寐に安からず。恋いこがれつ、ただみ仏の妙なる月の面かげのみ行住坐臥時として心のつまに繋らぬ時こそなかりけらめ。如何に聖者が霊恋の深きこといかばかりにてやありけむ。聖者は是世に云う宗教的天才の人とやいわんか。又愛の化現と云うべきか。聖は自ら霊恋の深きより世の人の肉の恋の為めには身を捨つるものさえあるとは霊の為めに惜しむべき命ならめやとて。

かりそめの色のゆかりの恋にだにあふには身をもをしみやはする

世の限りある肉情の為め、肉は霊に比ぶれば虚仮にてはあらずや、それでさえ世の中には一旦の痴情の為めに身をも命をも忘れて又此が為めには思を焦し神を煩わしたりなどするものままあるにあらずや。況んや又心霊更生して真理の命に入らんが為めに如来に対する愛慕恋念の為めに何ぞ有為の露の命はさのみ惜しむべきぞ、あさましや肉の為めには身をも命をも忘れながらいかにして無上の真理高尚なる霊に対する

恋慕の心はさまでにも起らぬぞかし。霊恋が肉による如くならしめば霊感交渉して霊に更生する事何ぞ夫れ難からんや。

経に肉愛に例して霊の愛を示せり。

般舟三昧経に念仏三昧に入って如来の霊応を感ぜんと欲せば行住坐臥一切の処一切の時に於て常に如来を憶念恋慕繋想して暫くも捨離することなかれ。今譬を以って示さんか舎衛国に一人の年若き郎ありて彼は常に遊楼に遊びて、巫山の夢見るしばしばなりき。然るに彼は己が家にありても彼は脳裡に印象したる戯女の面影は宛然として目前に彷徨せりと。般舟の行人一に専ら如来を恋想繋念して捨てざる時は如来宛然として目前に現われること又然りと。

吾人は経に譬えられしのと聖法然の「かりそめの」の歌とまた孔丘が賢を賢として色に交えよとの言葉によりて熟々惟うに、肉の恋のために昔より心を焦がし思を煩わして終に詩に歌に其の内容の秘密を洩せし事挙げて数う可からず。吾人は是を見是を

よみて感ぜざるなし。かほどにまでかりそめの事に煩わしたる心を若しも霊の方に交えて神を用いしならば定めて聖霊に感じ心霊化し成仏得道すべかりしものと。さりともしらずして心霊をして空しく仇なることにのみすててすぎにし人々のあさましさを思う。

吾人は古人のかりそめのことに用いし心情を惜しくこそ思う。いますこしく古人の心情をもらされし消息を挙げて見れば小倉百人一首の中に伊勢が

なにはがた短かき蘆の節の間もあはで此世を過してよとや

如何に迫り来たりしものぞ、わずかばかりのふしの間ほどもあうことが出来ぬと消えはててしまうかと実にその心細さあわれなり。思えば同情の涙をさえかねるのである。かほどまでに聖霊に憧がるるも、如何せん、此の身の業障の雲ふかくこれまでに焦るる心を遂げずしてむなしく涙にさまようは霊、月のみまほしさ、しかるに無明の雲にさえられて、真の如来の真面目を見ることの能わざりし一生空しく過ぎ行くこと

の悲しさよ。あせる心はふかけれども、如何にせん、彼此の三業相かなわずしてついに過ぎてしまうことを思えば消ゆるばかりの思いなり。

和泉式部は

あらざらむ此世の外の思出に今一度の逢ふこともがな

と、若しや此が為めには生き長らうことはかなわぬものとの覚悟の上とは云いながらせめては死にし後の亡き魂となりての思出に今一度のあうことのあろうかなと。

最早や此の身心は念仏三昧海に投じたるものなれば、命をながらえて居ようとも思わねども、浄土に行く身ながらも、一度なりとも此の世にて拝み奉りて浄土で拝むのと同じのなれども、せめてはあらざらん此の世の別の思出とまでに命をかけて愛念し上げたならば、如何でか拝むことの得ざらめや。法華経に衆生質直にして一心に仏を見んと欲して自ら身命を惜しまざれば便ち出でて為めに説法すと。肉の為めの気力つきたる処に霊界現前す。肉の心命つきるとき霊復活す。何ぞそれ疑うべけんや。身

体死して後と思うことなかれ。

平の兼盛は

忍ぶれど色に出にけり我が恋は物や思ふと人の問ふまで。と

真心に深く愛慕の念があふるる時は何時しか心は西にかかり如来を思うが故に行住坐臥に聾盲唖者の如くならば此三昧得易しと。こうまでに月のみかおに繋念して止まざる時は忍ぶれどやがて表にあらわれて物や思うと人に問わるるまでに至る。かく迄に深く愛恋止まざる時は何時かは三昧成ぜざるべき。

清少納言は

夜をこめて鳥のそらねははかるとも世に逢坂の関はゆるさじ。と

此は古事あり。鳥が鳴きし時に逢うことをちぎりしを、さりながら鳥のそらねをもてなくまねをして謀りごとにてあうとはしても決して謀り事にてはあう事は出来ぬ。至心に深く愛慕の心なくしては虚仮名聞の念仏にて三昧の門を開きて霊に感ぜんとし

ても決して是は許さぬ事である。

彼此三業の相応の門の逢坂の関を開きて三昧加持の妙処に至らんには一切の虚仮を捨てて至心に深く愛慕するに存す。

二条院讃岐は

我袖はしほひに見えぬ沖の石の人こそ知らねかはく間もなし。と

念仏三昧の窓を開きて円満勝応の月の御面を拝せんと心のそこは深かけれど如何せん業障の雲深かく彼此のへだてを除きがたく宿罪のほどを感じて懺悔の涙かわくまもなし。

私共は根本罪と自造罪との罪ありて之が為めに自ら障りへだてとなりて舎那円満の慈愛の御手をたづさえ御互に胸を打ち明けて両方を一として融合しがたくあうことのできぬうたてさよ。

所謂ゆる三因仏性ありながらへだてらるるぞかなしけれ。いつか罪悪の獄よりゆる

されて清浄無垢の霊態となりて彼此の三業相捨離せずという状態になることの出来ぬのであろうか。昨日も空しく過ごし今日も徒らにくらし思えば袖のかわくひまこそなけれ。

式子内親王は

玉の緒よたえなばたえねながらへばしのぶることのよはりもぞする。と

至心に深く愛慕し奉り自ら身命を惜しまざれば即ち出でて応現し給うと聞きつれば、とてものことに絶えなば絶えね、一大事の此の事をとげずして空しく生くるよりも死ぬるにしかず。一心に三昧定に入りて骨立ち枯死するとも三昧を得ずば寧ろ動かじと、この事ならずして生くるに忍びず、とても成ぜぬ事ならば年老ぬれば志気も随って衰えぬべし。然かなればながらえては何の甲斐かある。霊復活し霊の生命となりてこそ菩薩の天職をつくす為めに命の必要あるべし。之だにならずして生きながらうることもいらぬ事と、此れまでに心に深く愛慕の念より三昧に入らば悟り成ぜざるこ

とやある。

宗教的関係の神人両性の交感呼応を欲する宗教的衝動として神尊の霊応を憧憬欣慕することは孔子の所謂ゆる賢を賢として色に代えよとのごとくば愛恋の情により て神人交感し更生す。

理性より出づる愛

天性に基ける愛は肉体的なので動物的の愛にて、生理の自然性から発する愛である。高等なる理性の人類的生活は性欲から衝動する愛ばかりではない。理性が世界の自然物に対しても人類其他の生物に対しても自己の理想に適する物に対しては愛の情が起る。

理想が高等に進むと進むに随って愛の対象も高等である。忠君愛国等と云も真の忠

も孝も其君父を深く愛敬する中心より出でて初めて、至誠の忠孝も成し得らる。

我君ほど愛重すべきものなしと云う中心から君に対する忠となる。父に対するも亦然り。肉の性欲衝動する愛よりは遙かに高等にて理想の高き処から発動する愛である。また古代の哲学者等は哲学とは知識を愛する学であると云って居るのはつまり彼等哲人の理想は宇宙の実体とかまた認識とかを研究して其真理を知りたき欲望の起るは知識を愛する中心より起る理性的感情である。彼等は哲学上の知識を生命として愛して居る。彼等は己が全体を其研究に犠牲にすることを甘んじて居る。また愛国家はすべてに超えて国を愛するが故に国家の為なれば身を献げて妻子をも家をも顧みず。身を犠牲にして国の為に竭す。志士仁人の如きは国家を己が生命として愛して居る。

また古賢の伝言行録等を愛読耽味して、手の舞い足の躍ることを自ら知らざるに至る如きは、己が理想に適する真理を愛する高等なる感情から起る愛である。

国家を愛しまた衆を愛する博愛の如きは最も理想の高き情より起る。すべて人類と

他の動物との精神の異る処は他の動物のは天性即ち生理に機制せられて起る所の情なので器械的に発する衝動である。人類は理性と云う高等なる精神作用を有って居るから能く物の真理を理解し観察も出来、理を推察もする。

天性と理性との愛

禽獣にも人間にも共通なる生理の自然性から起る愛の感情と、理性が能く発達した上の愛の情とは大いに異って居る。例えば爰に一の牝鶏に十羽の雛子があるとせよ。母鶏が壮健な雛子をば可愛がり之を保護して、其の危きを保護する為には己が身を忘れて救わんとする。然るに若し一羽の雛子が虚弱にして已に死に垂んとするを見ても敢て此を顧みざるが如し。之と人類の理性から出づる愛との異る処は、例えば五人の子女を有てる母あり。五人共に可愛ことは等しからんも、若し中に一人の子が病に罹

って苦しむを見る時は、他の四人の身を忘れて一人病者の上に憐愍の情がかゝる。是何故ぞや。人類には天性の愛と共に理性と併行する感情あり。理性は能く己を以て他を恕る働らきがある。己が苦を以て他の苦を推察するが故に他の苦に対して同情の禁じ難き愛情と現わることは理性のある人類と他の動物との精神の程度同じからざるを以てなり。人類中にも理性が能く発達せる賢人君子と小人とはまた階級がある。小人は己あるを知って他を忘れ他人の迷惑などを左のみに感ぜず。しかるに君子は博愛衆に及ぼす如きは高等なる理性が能く発達して居ると然らざるとによる。是天性と理性との愛情の程度を異にする所以である。

霊性的の愛

青春の情から起る性欲の自己の情に適したる異性に対して起る愛の感情を『詩経』

に窈窕たる淑女は寤寐に之を思う、之を思うて得ざれば展転反側すと。賢人君子と雖ども生理の愛情なきに非ず。されば其恋愛の情の為に胸を焼き思をこがす。其内心の燃ゆる恋情の情が恋の歌となり愛の詩と発表し、全生命を恋の火となし玉の緒の絶えなばたえよなどと発表せし如く恋に生命をささぐ。

されば古往今来肉我の愛恋の為に懊殺せられ悶死せし魂魄が宙に迷いしこと幾千ぞや。肉に生命を与うる処の恋愛既に然り、一層高尚に進みたる精神の霊性の生命を認める賢聖、霊界の偉人には霊我よりして理想せる対象に対して愛慕の情何ぞ発らざらん。

肉の生は肉により理想に適える異性に対しては愛が特殊的に恋愛として活動す。又理性は我理想に適いたる賢人君子を慕うて止まざる如く、霊性は霊界の美人を認信する時は其霊格に対して、霊格と接触しそれに我生命をも献げて之を我有とし之と一体不可離の関係まで行かざれば止まぬと云う情が発る。之霊の愛、霊の恋である。是宗

教的天才の頭脳には盛に発動する霊的感情である。肉我が異性に対する愛なるものは本は生理の自然に規定せられて生理的に性欲として、異性を愛する性能はつまりは生理自然種族保存の理から衝動として働く力なり。霊性が宗教的客体なる霊格に憧憬するは、霊的衝動として発る最も高等なる感情である。恰も肉我の性欲が異性に愛の力を注ぐ如くに霊我の感情は霊格に愛の力を傾けて、肉我の相愛を遂げたる結果は種族を産生すると同じく、霊我の聖霊感応の結果は聖子として霊き生命と生るるにある。

肉体にても未だ充分に発達せざれば性欲もまた発らざらん。人霊性未だ発達すべき素養もなく未だ発達せざれば対象たる霊格に対しての愛念も発らざらん。

然るに天性欲たる性の愛を遂行せんが為には、世には生命をも賭し全力を尽して求むるではないか。若し霊性が発現して見よ、永遠の生命を共にする宗教上の霊格との聖霊交感を求め神の霊応に接触せんとの愛の殊なるを。霊恋焉んぞ発らざらん。此霊的衝動が益々昂進して神の霊応を惝恍憧憬する霊恋は如来の霊応と神秘交感によりて

聖き生命と復活すべき予備的心理なり。霊愛聖恋は霊性が神性と感応交感すべき動機なり。

霊恋は有ゆる感情上の最高尚に深遠に幽玄にして微妙不可思議なるものなり。大宗教家の胸臆に熱烈に活動する力なり。霊恋は己が霊き生命の緒を神の愛と幾重にも幾重にも結びつけていかなる事情の下にも永遠にまで断絶することなきを願う心なり。

此聖き愛は宇宙一切に超絶して此愛する神ばかり絶対にして一切に比すべきも類うべきもなきものと信ず。而して彼は一切の万法完備して微塵程も欠くる所なきものと信じて絶対的に愛す。我生命全部を献げて彼に容れられんことを欣う。此の霊の結びは我全部は彼の有となるので彼を離れたる我は無いのである。而するとまた彼は我有となるので彼と我とは永遠に離婚のできぬ約束となる。然も無条件の約束なのである。宗教心は神の現われなる霊的人格を慕う。何故に霊的人格を愛慕するのであろうとな

れば、其霊格に接触せざれば自己の霊性が霊き生命となることが出来ぬからである。

愛は生命

楞厳には衆生の愛欲を以て生死流転の根本と示されてある。若し衆生に愛と欲とが無かりせば生死は受けまじ。我汝が志意を愛せば汝はまた我情を愛す。すべて愛し愛されて其神識を率引して生死を受く。また大乗の諸菩薩は一切の衆生を度して然して後自ら成仏す。然るに声聞の羅漢果を得たる如くに煩悩を悉く断尽する時は愛欲已に滅するが故に生死を受くる原因亡ず。然る時は生死界中に受生して衆生を度すること能わず。故に諸の菩薩は自ら誓を以て愛欲を断尽せずして、生死の身を受けて常に衆生を度すと。

愛なければまた衆生を度すべき心意なし。唯菩薩の衆生を愛すると凡夫の愛との異

る所は、凡夫は天性を本とし生理から発する動物的の愛欲なので菩薩は霊性から生ずる愛なので、甲は闇黒的乙は光明的、甲は互に相愛し合て生死に流転す、乙は慈愛を以て永遠の生命に誘引す。愛は感情上の最も麗わしき心理状態なれども霊性の光の中に出でたると生理的の闇黒裡に出でたるとの異あり。

然れども如来を愛して自己の霊性を愛して霊的人格霊的生命が顕れる時は、如来の聖意を自己の意とするが故に如来が一切衆生を愛する如くに我もまた衆生を愛す。衆生相互の霊性は本同一の如来性なるが故に、此霊性を根とする衆生相互の間にまた生理的の身にも及ぼしてすべてを愛するに至る。斯の如きの愛は暖かき血の通う愛にして霊の光による最高等の理想麗わしき感情にして、若し之を表象せば観世音菩薩の慈悲のすがたにて示さるる。聖観音の頭に戴けるは常に如来を憶念して離れざる愛慕の表示と信ず。教祖世尊が六根清らかに姿色永しなえに麗わしく在ししもまた霊界に輝ける弥陀を憶念しつつある反映にあらずや。感情的愛の信仰は霊界なる人格的の如来

を求めて止まず、而して霊界に輝ける人格的の愛の現われなる相好の美しき如来の愛の中に融け入るほど微妙なる霊感はなからん。

大慈悲の霊力

如来の親縁は人の宗教的感情に対する客体にして如来の大なる愛なり。感情の対象たる如来の性能なるものは一種云う可からざる不可思議の霊力にして其に対して霊的憧憬鮮な活気にて憬る可く恋う可く愛す可く敬うべく畏敬すべし。吾人は此の大愛の権化の如来に対する心情は瞬間も離るること能わざるなり。若し我感情が愛なる神との親縁を断せんか生存の望なきなり。神を愛する霊恋より出づる霊泉は我を活かしむるなり。如来の愛の太陽の熱なからんか地上の万物は生存しえざるなり。如来の霊愛なからんか吾人の心霊は瞬間も活きざるなり。

如来の大なる愛より発動する霊力はすべて信念の聖霊を活して恰も太陽の熱と力によりて地上の有機物を生活せしむると同じ。吾人の感情は暖温にして且新鮮なる活気の中に呼吸し霊の生命は之によりて存し、温暖なる気によりて吾人が心の華は麗しきを得ん。春の温暖なる気候によりて朝日に匂う桜は染み出づべく、霊なる其の力は実に聖なる観世音として聖霊の桜は咲くべきなり。暖なる光の家庭にこそ文殊の如き児も出づべきなり。

春の気と桜花

敷島の大和心を表明せる彼の爛漫たる花を見よ。世界に国という国は数多あるもすべての国に超えて独り春色の優秀なる光景を呈せるものは吾が旭の国にあり。斯国の風土自然に特性を有せり。風土気候の関係四季能く調熟し春日和の気候風土が斯の爛

漫たる花を顕わし馥郁たる其力を此桜という木に藉りて現わしたるにあらずや。斯の風土の斯の気候の無き所に此の花ありや。

雪空の寒さは已に北緯の方へ送り風徐に南より流れ来る和気暖光は自然が生物に対する愛と云わざるべからず。斯の自然の愛が桜の木を囲めば此愛が無情なる枝に万斛の愛嬌をこらして人をして其美に酔わしむ。また人という生物に感じ来る時は自ら旭の出る国人という一種の美なる色を呈するにあらずや。

自然の愛已に然り。よりはよりは最高等に霊妙に不可思議なる宇宙の心霊に常に流行せる所の聖光霊気によりて咲き出づる霊なる華を見よ。旭出国に生じたる桜のそれと同じく、人の信念という霊なる心を素因として如来の不可思議なる霊光と聖なる恩寵の和気に縁りて咲く聖なる心の華を見よ。極楽の言語に絶えし境界宝林宝池等の光景はこの如来の大なる愛の聖き光りと聖なる気によりて開きし心の華のすがたならずや。旭日の国に吹き来る春風和気が大和心の桜花を催すと同じく、聖光霊気に暖めら

れて開く心霊の華こそ活ける観音として称せらるべし。

聖霊を体する信念を素因として恩寵の親縁に催されて聖なる心の華は咲きぬるなり。かく諸の衆生と共に霊花の開く所即ち楽園にてぞある。春の旭の国の全面に桜花の春を呈せるが如く霊の恩寵はすべての心をして美天国の百花園を現出す。

例えば太陽の力によりて熱を発し地上のすべての有機物即ち動物も植物もみなこの力によりて生活す。若太陽の熱なからんか地上の生物生存し得べきものやある。これと同じく如来の大なる恩寵の暖なからんか吾人の信念は生存し能わざるなり。

我霊は如来の恩寵によりて生く。

親縁と疎縁

親縁の如来心光と衆生心との内容の親密なる交感にて其恩寵を感合するに能く適

せる素質と適せざる性質とあり。之を先づ植物の栽培に例えんか種類がよく其土地に適当せるものは益よく繁殖し、然らざるものはこれに反す。而して如来は宇宙間最霊なるものなり。其霊を感合し之に感化するに適当なる人性を有するものは宗教的感情が豊富にあらざるべからず。

沃土と硬地との区別あると同じく、如来の聖霊を感受すべきものは沃土にして聖き種子を播下するに適せり。これに適せるものは仏教にて宿善と名く。また一方には父母祖先よりの遺伝的素質とまた幼年よりの家庭また社会教会の周囲に行われつつある恩寵は人が恩寵を感受すべき要素を造り信仰の準備を構うるものなり。斯様な事情によりて要素を造り、正しく心光の親縁を蒙りて信仰の内容なる感情を長養す。

いかなる性質なるものが心光の親縁と結合すべきものなるかをしらんために先づ其反対なる之に適せざる性質の方面より敍せん。如来の恩寵の親縁に反対なる人の原因なる性に所謂八難なるものあり。是れ恩寵を獲得する為には甚だ困難なるものとす。

八難とは一、地獄的の性格。如来の心光を受るに極めて難き極悪の凝結せるもの。世に悪人あり、残酷無道、良心は已に滅び真理の光も彼が理性には徹らず、如何なる慈悲も彼が感情には還って仇となる。次に餓鬼道的性格。一は肉欲にして霊我が肉我の感官的衝動を支配する能わざる為に発す弱点、例せば不節制放蕩懶惰等の抗進せる病的に堕せるもの。二は我慾の強度なる悪弊症に陥りしもの。排他的にして周囲を害し貪慾不正悪意逞しきもの。次に畜生的性格。愚痴弊悪にして唯現在の肉の外に求むるもの無く栄養生殖の外に求むるなきもの。次に修羅的性格。傲慢無頼知らざるを己に知れりと謂い、己れ独り偉なりとし他を軽蔑し道を軽くし賢聖を軽んずるもの。次に世智弁聡なる人。唯眼耳の先のみにて、心の深く如来に親づきしことなし。次に無想天とは空想に沈滞して、大なる大愛によりて活くるを求めざるもの。次に聾盲唖痴人等とは盲唖というも宗教的の盲唖なり。世俗には眼耳あるも宗教の真理を聞く耳なく霊に対する盲唖なり。すべて此らの機類は心光の親縁と感合すべき素因なきもの

とす。

いかに如来の光明も斯る衆生には照すに由なく深き恩寵も斯るものには被るに便なく親縁に対する器にあらず。しかれども全く己が非をさとり改悔懺悔の信念によれば如来には増上の勝縁ありてこれを照被して親縁に接す。

性質が相互に接近し抱合して密接なる関係を希望するものと、性質が相互に離隔を欲するものとあり。其例は化学上に於て或る元素と相接近を欲するものと相互に離隔を欲するものとあり。人の性質に於ても宗教的要素に豊富なる性質の人は飽くまで如来を憧憬し憶念して親接を求め、反対なる八難の性質には之を嫌忌し憎悪して近づくことを欲せず。水火相容れずと、水力強き時は火を消滅し、火力強き時は水分を干燥す。此の両性は相容れざる如くなれども若し薬鑵に水を容れ火をもて之を煮る時は水火相容れ水火結合し、水熱する時水火相接し親和したるなり。衆生に信心水已に充ち如来の恩寵之に加わる時は信仰と恩寵とは親密に関係し暖温なる熱力は如来の恩寵を

感受すべし。

譬えば太陽の力によりて地上の動植物は生活すると同じく一切衆生の霊なる生命は如来の恩寵によりて存せり。大なる霊の瀑気を呼吸せる霊は新鮮なる活気あり。春日和の暖き風に百花爛熳と色香を競う如く人の霊なる麗しき生が麗しき花を咲くは聖寵の暖なる霊気によりてなり。

最上の親密

如来の心光に三の能ある中に於て親縁とは大なる愛、即ち大慈悲の暖温なる光即ち人の宗教的感情に対して温熱を与うる能力にて平和、潤沢、歓喜、妙楽、安穏等のあらゆる大慈悲の霊熱に融合する時は即ち暖めらるる心情は辱なしと言わんか嬉しと言わんか尊いと言わんか、心理上最と優美なるいと微妙なる、一種云う可からざ

る不可思議な感情なり。太陽の力より起る所の熱温なからんか地球上の有機物は生存する能わざると同じく、大慈悲の霊力によらざれば人の心霊は活きうべきものに非ず如来の大愛の光によりて生息しこの温暖なる霊気、新鮮なる活気によりて呼吸して吾人が霊の命は存せり。

信心の眼を開きて観ずれば斯大愛の権化たる仏陀の妙色相好円満していませるに対して愛慕恋念の霊的衝動は斯大愛と瞬間も離るゝ事を希わざるなり。吾人は謂う。若し愛なる神との親縁を断ちて世に生存すべしと命ぜらるる時は吾人はこの霊愛を離れて肉のみの生活は一日も耐え得ざるなり。若しまた曽て斯の霊の生命に入らざりし昔はいざしらず一度この大愛の中に生息することを得たりし身は如何にしてこれを離れて生存の望みやある。宗教的感情の最とも甚深なる妙味は悉く斯の如来の愛の泉より湧き出るなり。

信仰にしてアナタの大愛を欠く時は恩恵の感ずるなく感謝の念なからん。神は唯道

徳のみ司る指導者として厳粛なるのみならば吾人が処世上に大安慰を与うものにあらず。

恩寵の光は温暖なり熱中なり。この光の中に和気靄々たる家庭を保持し得べし。大なる愛の熱ほど世の人々の吾と彼との交りを親密ならしむるものなし。斯の愛の大気に霊酔するときはすべての怨恨嫉悩などの害他の機能痲酔して唯平和と歓喜とのみをもて生活す。

大愛の熱線は人の心霊を融化してすべての感情上の憂悲と苦悩とを除きて唯平和と歓喜とのみをもて立たしむ。

親縁は如来より衆生に加わる恩寵にして、人の感情には愛即ち如来を愛楽する信念これに相応す。この相互の感応する処に宗教的不可思議感情の霊感なるもの生ず。衆生が如来の恩寵に対する感情に恋愛の如きあり。愛慕の如きあり、恋人に対する如く子の母を慕う如きあり。最も神秘の甚深に至っては彼此融合し肉我なるものなく唯

一大真我のみ。不可思議の感情最も純粋にして最妙楽なるもの此の神秘的融合なるものに比するなし。

吾人が初めて如来の大なる愛を聞き初めて雲井はるかに霊的に憧憬したる初心より此愛によりてますます信念を長養せられ発達せられ来りし信仰の歴史をしばらくいわしめば。

如来の親縁に対する衆生の心念の一毫も機嫌するなく忌憚なく最も親密なることは世間の父子夫婦兄弟君臣朋友の比にあらず。人の感情上同情的感情あり、この感情の出立点は血族関係中最も深きは母子に在り。母子は本来物質的に一体より分れたるが故に苦楽愛喜の同情に於て最も親密なる関係あり。

人の快楽と苦痛とは同情をもて広まる傾向を有するのみならず、また反情を惹起すべき傾向を有せり。他人の幸福に嫉妬を惹起し之に反して不幸には悪意的歓喜をもて住するさえあり。

肉我の中に於て最親密なる配偶者の相互間に於ても苦楽を共にし偕老同穴の契り深ければ苦楽を共にし憂喜を一にするは本よりならんも、然れども或場合に於ては婦の真実内容の情実を良人に対して明し兼ぬること無きにあらざるべし。若し此の真情を明す時は良人の忿に抵る可きやと慮り、或は自ら疎ぜられざるやと恐れての故に。然れども斯る事情も如来に対しては、心念に言いて事情を打ち明して或は訴え或は感謝し、または其罪の許を求め、または大なる慰藉を求めんために少しも機嫌するなし。また血を分ちたる母子の間に於てもこれと同じくいかなる事情も明し兼ぬる場合は無かる可き筈なるも事実は然らず。若し此の事情にして全く母に語る時は或は母を悲憂せしむるの憂なきや。または母をして忿怒せしめはせずやと慮りて其実を明しかぬることなき能わざる可し。兄弟朋友に於てもまた然らん。或事情は明し難きこと必ず有るならん。然るに如来に対してはいかなる事情も暁し難きこと有るなからん。而して之を人には覆蔵し陰蔽すとも如来の前には陰すこと能わざるなり。

若し己れが身に犯しまたは意の思想によりて犯せる罪により為に煩悶に耐えざる時も、実に以て如来の前に於て発露懺悔してまた再び犯さざらん事を告白するならん。また如何なる大なる憂悲にも苦悩にも如来の大なる霊力より観ずる時は難きことやあらん。故にいかなる憂苦にしても自己の信念だに強度なる時は如来の増上縁によりて自己の苦悩は旭日に対する草露の如くに消えぬ可し。

如来は吾人が艱難にも困苦にもいかなることに対しても捨て給わず。

また人の感情なるものは意志と共に転変常無きものにて常住不動なるものにならず。朝に衣寵に預るも夕に斧鉞の恐ある如く、曽て寵愛比なきも終に秋扇の恨を含みて退く。萠え出るも枯るるも同じ野辺の草、孰か秋にあわではつべき。人の寵愛もまた寒暖の気候にも遷り変りなき能わざるをおもえ。然るに日月は変ずべきも、決して易ることなきものは独り如来の恩寵なり。唯須らく此信念を全うして親縁に接することを祈る可し。

もしひとみおやのみひかりの、　みいづのちからをきゝまつり、
よをひにつぎてみなをいい、　たちゐおきふしおもいてぞ、
さまやにこゝろをこらしつゝ、　みむねのあらわれいのりなば、
めぐみのひかりにとけあうて、　きよきこゝろによみがえり、
うよのこのみをすてずして、　たのしきそのにすみあそび、
いよゝつとめをはたすひは、　みおやのもとにいりぬべし、